

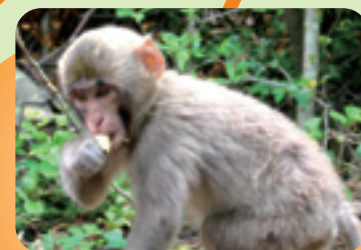
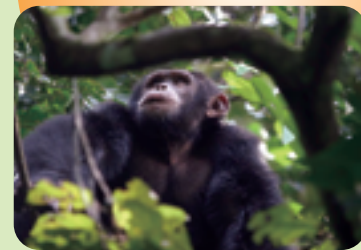
分子から生態まで 多様な研究活動

京都大学霊長類研究所は、人間を含めた霊長類の多様な種を対象として、分子から生態まで幅広い視点から学際的な研究をおこなっています。

その志向するところは、霊長類に関する学術的研究を総合的に推進し、人間の本性とその進化的基盤を明らかにすることです。



社会・生態



育成・福祉



分子・生理



進化・系統



行動・神経



多彩な教育活動

理学研究科生物科学専攻霊長類学・野生動物系として独立した大学院を持ちます。高い専門性と幅広い視点を有する研究者の養成を目指しています。国内・国外の幅広い大学から入学し、修士課程から、各自の研究テーマに沿った専門的研究に取り組み、担当教員による個別指導を受けます。



実験室の実習



野外学習



東京公開講座



犬山公開講座



大学院生会



オープンキャンパス



市民公開



展示資料室

様々な広報活動

訪問者の方々に霊長類に関する理解を深めていただくために、展示資料室に解説パネルや霊長類の化石模型、骨格模型、チンパンジーの使った「道具」などを展示しています。

また、一般の方を対象として公開講座を犬山、東京で実施しています。また、市民公開もおこなっています。

その他、大学院志望者を対象としたオープンキャンパス（大学院ガイダンス）を実施しています。



■進化系統研究部門

進化形態分野（進化形態）

霊長類の形がどう進化したかを化石に探り、どの地域にどのような形のサルが暮らしているかをフィールド調査や標本から研究しています。胸骨下の霊長類の成長・加齢を追跡・記録し、進化の謎に迫っています。

写真:東南アジアのカニクワイザルの調査



■ゲノム多様性分野（ゲノム多様性）

タンパク質やDNAの分子変異から個体や種のちがいを調べ、多様性、系統関係、集団の遺伝的構造を研究しています。また、繁殖群の遺伝的統御や保全遺伝学への応用研究も進めています。

写真:野外で採取した材料のDNAを分析する



■系統発生分野（系統発生）

霊長類は約6500万年に出現し、その生息域を世界中に広げ進化してきました。原始的な霊長類から直立二足歩行をする我々ヒトへとつながる進化のプロセスを、地球環境変動の観点から研究しています。

写真:ミャンマーでの化石調査



■社会生態研究部門

生態保全分野（社会生態）

霊長類の個体群動態、採食生態、行動生態を生態環境との関連に着目して明らかにするため、日本やアフリカ、東南アジアでフィールドワークによる研究を進めています。保全のための基礎研究も推進しています。

写真:屋久島のニホンザルの母子



■社会進化分野（社会生態）

霊長類社会の進化とホミニゼーションの過程を解明するために、日本、アジア、アフリカなどの調査地で、野生霊長類の行動と生態に関する研究を進めています。

写真:枝を使いハチミツをとるチンパンジー



■ボノボ（林原）研究部門

アフリカの野生のボノボの解明を進めつつ、認知機能の実験的研究を国内で立ち上げて、バノ属2種とヒトを比較した研究から、人間の本性の進化的基盤を解明します。

写真:アフリカの野生ボノボの集団

研究活動

注:分野、施設の後に () で記載した名称は大学院理学研究科生物科学専攻霊長類学・野生動物系の分科名です。



■行動神経研究部門

思考言語分野（思考言語）

主としてチンパンジーを対象として、ヒトを含む霊長類の知性を比較認知科学的視点から検討し、感覚・知覚・思考・道具使用・コミュニケーション・模倣・欺き・他者理解・文化伝播等の研究に取り組んでいます。

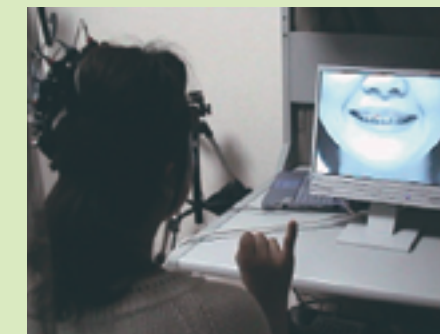
写真:数字の順序を学習する「アユム」



■認知学習分野（認知学習）

ヒトを含む霊長類の認知機能やコミュニケーションについて、認知科学や比較行動学の手法を用いて研究をおこなっています。実験室から野外での行動観察まで幅広く取り組んでいます。

写真:唇の動きを読むときの脳を調べる



■高次脳機能分野（高次脳機能）

知覚、記憶、判断、情動、随意運動など霊長類の「知的」な行動を支える脳内の仕組みの解明を目指し、神経細胞活動、神経回路等の解析をおこなっています。

写真:神経細胞の電気活動を調べる

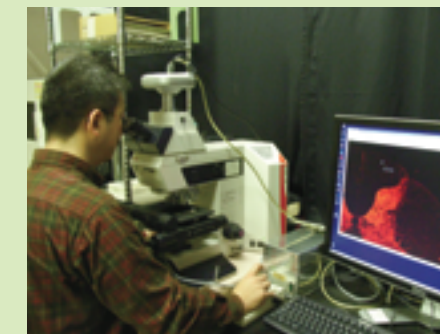


■分子生理研究部門

統合脳システム分野（統合脳システム）

神経連絡解析や遺伝子導入法、遺伝子発現解析等を駆使し、神経ネットワークがどのように働いて運動制御や学習などの神経機能が実現するかを解明することを目指しています。

写真:脊髄の免疫蛍光像の顕微鏡観察



■遺伝子情報分野（ポストゲノム科学）

霊長類ゲノムリソース情報利用、各個人のゲノム・遺伝子解析を基盤とし、染色体・反復配列 DNAの進化、味覚・嗅覚・視覚などの感覚系機能の進化、比較ゲノム研究をおこなっています。

写真:蛍光顕微鏡による染色体の解析



■比較認知発達

（ベネッセコーポレーション）研究部門

乳幼児期の心の発達を人間とそれ以外の霊長類で比較する研究をおこなっています。（ベネッセコーポレーションの寄附研究部門）

写真:チンパンジーの認知発達研究



■人類進化モデル研究センター

（実験動物科学）

ヒト進化研究のモデルとなる研究用サル類を開発・育成を目指し、研究所保有サル類の飼育管理、健康管理、自家繁殖、情報管理をおこなうとともに、飼育・繁殖や疾病、成長、動物福祉等に関する研究をおこなっています。

写真:病気のサルを治療する



■国際共同先端研究センター

（ベネッセコーポレーション）研究部門

霊長類研究所は、平成21年度から共同利用・共同研究拠点という新制度のもと、国内だけでなく国外との共同研究や、新しい学問の創出をめざしている。外国人教員比率をふやして、「ここから」「からだ」「くらし」「ゲノム」の研究を推進する。

写真:ギニアの野生チンパンジーの石器使用

